

Title	文禄・慶長の役とキリストン宣教師
Sub Title	The Bunroku Keicho no Eki (文禄慶長の役 the Hideyoshi's expedition to Korea) seen through the Jesuit Documents
Author	柳田, 利夫(Yanagida, Toshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1982
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.52, No.1 (1982. 6) ,p.19- 39
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19820600-0019

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

文禄・慶長の役とキリストian宣教師

柳田利夫

キリストian宣教師の文禄・慶長の役に対するかかわりあい方を、主としてイエズス会宣教師による史料をもとに、若干報告したいと思う。もとより、これまで積み重ねられて来た日本国内史料に基づく研究に何物をも付け加えるものではないが、当時の宣教師が侵略戦争たる文禄・慶長の役を如何に捉えたかを検討してみるのもあながち無意味な事でもないであろう。

I

朝鮮の地が宣教師にとって大きな関心を引いていた事実を物語る史料には今のところ出会いがない。宣教師側の史料を網羅して調査した訳ではないが、少なくとも宣教師が當時（文禄・慶長の役前後）積極的に朝鮮布教を推進しようとしていた痕跡は見られない。彼等が曲りなりにも朝鮮を布教の対象として意識しはじめるのは、むしろ秀吉側からの働きかけが、切っ掛けになつたものと思われる。

一五八六年、準管区長ガスパル・コエリョは秀吉と大坂城で会見し⁽¹⁾、その席で秀吉は宣教師達对中国征服の意向を披瀝し、通訳

として同席したルイス・フロイスの報告に拠れば、その実現の為に二隻のポルトガル軍船の斡旋を求め、この斡旋に対する反対給付として、征服地のキリスト教化、教会建設、更に日本の半分のキリスト教化を申し出たと言う。⁽²⁾一方、やはりこの会見に同席したオルガンチノに依れば、この軍船の斡旋はむしろコエリョ側が積極的に申し出たものであるとしている。⁽³⁾後にオルガンチノ同様、コエリョの過度の政治的軍事的介入の方針に対し、強烈な批判を行なつた巡察師アレッサンドロ・バリニャーノも、一五九〇年一〇月一四日付（一〇月一二日付書翰の追伸部分）書翰において、コエリョが軍船の斡旋を自ら申し出たばかりでなく、秀吉の中国出兵時にはインド副王に依頼してポルトガル人の援軍をも派遣させようとしたとローマの総会長に宛て書き送っている。⁽⁴⁾

ポルトガル軍船斡旋の提案を行なつたのが秀吉であるのか、宣教師側であるのかを確定するのは現在の所不可能という他なく、それを徒に穿鑿するのもあまり意味があるとは思われないが、少なくとも会見の席上中國侵略についての話題が出され、ポルトガル軍船の斡旋が話し合われた事、更には宣教師側がこの斡旋を拒

否していない事等、諸史料における共通点を再吟味してみる事は重要であろう。この報告で問題とする限りでは、これ等の点から

だけでもこの会見における宣教師の思考のパターンはある程度明らかになると思われる。即ち、秀吉の中国侵略戦争に対する援助が教勢の拡大に繋がるのではないかという考え方で、日本布教自体が中国布教への橋頭堡と考えたフランシスコ・ザビエル以来、広大な中国が宣教師の垂涎の地であつた事を思い起せば、こういった思考のプロセスは極めて自然なものと言えよう。また、軍事援助に拠つて教勢の積極的・消極的、維持・拡大を図るという方針は領主層に対し宣教師がそれまで執つて来たものであつた。

大坂城における会見のほぼ一年後、一五八七年五月二八日（邦暦天正一五年四月二一日）コエリヨは肥後八代において再度秀吉と対面する事になつた。当時、圧倒的な軍事力を背景に九州に向した秀吉は、各地で勝利を得ながら進軍を続け、九州平定迄島津氏を残すのみとなつた。⁽⁷⁾ 今回の会見につきフロイスは、一五八八年二月二〇日付の年報と、著名な「日本史」⁽⁸⁾ の二つの史料を残している。前者においては、中国征服に関する記述は為されてしまつたが、この件が今回は話題にならなかつた可能性もある。しかし、後者では、この会見に同行したポルトガル人俗人（当時、平戸で越冬中のドミニゴス・モンティロの船の事務長等三名）に対し秀吉は中国征服の決意を述べ、それに対する彼等の意見を求め、彼等の返答に非常に満足した様子を示したと記録されてい

る。このポルトガル人達の返答は具体的に記されておらず明らかにできないが、秀吉に一応の満足を与える類いのものであつた様

である。

更にコエリヨは、九州平定後、秀吉と再度会見し、そこでも中國征服計画が話題になっている。この前後の事情については、宣教師追放令の公布との関係で屢々言及されているので多言を要しないのではあるが、この報告で問題となる点を挙げれば、この時秀吉はコエリヨの乗船して來たフスタ船に大いに興味を示し、船内を見て廻っているが、それ以前に秀吉麾下の諸領主がさかんに同フスタ船にやつて來ている事実や、まさにこのフスタ船が「軍船」であつた事等であり、それ等を考え併せると、この秀吉のフスタ船訪問は看過できない様に思われる。また、前述のバリニヤーノ書翰中に、小西行長がコエリヨに対し同フスタを秀吉に献上すべく進言している事も記されているが、（註④）に述べた如く、この書翰の内容に全幅の信頼を置く事はできないのではあるが、これもこれまで述べて來たコンテクストの中で理解すべきものと思われる。⁽¹²⁾

II

宣教師追放令前後の宣教師の軍事的介入とのかかわりあいの中でも、中國侵略計画への宣教師側からの関与について見て來たが、バリニヤーノの第二次日本巡察を契機に、軍事力行使や軍事的介入志向は依然としてイエズス会内部に燃りつつも表面的には否定されるに至つた。しかし、秀吉の中国侵略が新たなる布教地の開拓・獲得に繋がるといった期待はそのまま残される事となつた。バリニヤーノは、秀吉がそれを意図している訳ではないが、彼

がキリスト教徒領主を役職に就け、中国侵略を開始する事で結果的に中国布教の門戸を開く事になるとの期待を書き送っているが、この種の期待は、小西行長が中国側と和平交渉を開始した際⁽¹³⁾、當時在鮮していたグレゴリオ・セスペデスがこの機に乗じて中国布教の門戸を開放すべく交渉を進めようと企てた事により、一層高まる事になった。セスペデスは朝鮮から、コエリョに替つて当時準管区長の職にあつたペドロ・ゴメスに宛てた書翰の中でこの交渉に触れ、和平交渉をきっかけにして、中国々王から布教許可状を獲得すべく話し合いが持たれた旨、書き送つている。

日本国内においても、この交渉に大きな期待が寄せられており、都からオルガンチノが書き送つた所に拠れば、中国からの和平交渉使節の離日に際し小西行長が一人のペードレを北京に迄同行させ、北京で中国布教許可の為に交渉をさせる意志であつた事がわかる。また、内藤如安が既に赴いており、その影響で宮廷内の宦官達がキリスト教に大いに関心を示している事に言及し、中国布教の可能性について書き送つている。⁽¹⁴⁾中国からは、マテオ・リッヂがこの件につき、オルガンチノやフランシスコ・パシオ等の日本からの情報に基き、小西行長が宣教師の中国入国の方努力している旨、総会長に書き送つている。⁽¹⁵⁾中国布教の直接の担当者であつたりッヂも朝鮮経由による布教に何がしかの期待を抱いていた様である。

他方、秀吉の朝鮮出兵と相前後する様に日本布教を開始したスペイン系の諸修道会士達も、違つた視点からではあるが、この交渉に期待を寄せていた。フランス司会士、サン・マルティン・

デ・ラ・アセンションは、彼の日本に関する報告書の中で、秀吉の朝鮮侵略の結果、日本と中国との取り引き、交渉が開始されるであろうから、その機に乗じて宣教師を中国に派遣し、中国布教を開始すべく論じている。⁽¹⁶⁾更に彼は別の報告書の中で、秀吉の和平交渉の機に乗じてハイナン島を征服し、中国本土征服・布教の基地にすべしとの議論に迄及んでいる。⁽¹⁷⁾このアセンションの考え方には、マニラにおいて兼々考慮・検討されて来た中国の軍事的征服計画が、秀吉の侵略戦争を機に再燃したものと考えられるが、その持つ意味を過少に評価すべきではないと思われる。

ところで、こういったいわば、希望的観測とは裏腹に、朝鮮での戦闘が実施されてゆく過程で、中国布教の門戸が逆に狭められる。一五九三年一一月に、早くも、バリニャーノがこの点に言及している。彼は、マテオ・リッヂの努力にもかかわらず中国布教の扉が開かれないと危惧も序々に抱かれるに至つた様である。一五九三年一一月に、早くも、バリニャーノがこの点に言及している。彼は、マテオ・リッヂの努力にもかかわらず中国布教の扉が開かれないと危惧も序々に抱かれるに至つた様である。一五九三年一一月に、早くも、バリニャーノがこの点に言及している。彼は、マテオ・リッヂの努力にもかかわらず中国布教の扉が開かれないと危惧も序々に抱かれるに至つた様である。一五九三年一一月に、早くも、バリニャーノが他の多くの書翰・史料で語つてゐる如く、教勢拡大に対する期待が先行してゐたと言える。

しかし、朝鮮における戦闘が膠着状態に陥り、和平交渉も決裂した事により、この侵略行為が中国布教に有害となるとする見解が力を持つ様になつて行つたと思われる。ドゥアルテ・デ・サンデはジョアン・アルバレスに宛てた書翰の中で、前述のバリニャーノの危惧とほとんど同じ見解を披瀝し、中国人の外国人に対する

る恐怖心が増大してしまったと述べ、直接指摘せぬまでも、中国布教停滞の一因を秀吉の侵略行為に帰するが如き発言を行なつてゐる。⁽²²⁾ バリニャーノも、若干異つた視点からではあるが、マカオのコレジオに日本人イルマン、同宿を學習の為に派遣する計画につき、自らが推進して来たものにもかかわらず、中国人の危惧を徒らに刺激する事を恐れ、その実施を延期する様指示している。⁽²³⁾

III

次に国内情勢との関係において、宣教師がこの戦闘行為をいかに意味付けていたかについて若干考えてみたい。

一五八七年の宣教師追放令によつて教勢が極端に落ち込んだといふ事実は見られないが、宣教師の表立つた政治的活動は大きく制限されざるを得なかつたのは言を俟たない。そこにコエリョによる軍事力行使計画（武器・軍隊の派遣要請）が一つの対抗策として再浮上して来る一つの原因がある訳であるが、周知の如く、この計画は一部分を除き現実のものとはならなかつた。これとほぼ時を同じくして、国内では高い信憑性を持つて、キリスト教徒諸領主の国替が取沙汰される様になつてゐた。宣教師はその危機感の増大とともに何らかの対抗策を探らざるを得ない情況にあつたのであるが、追放令下の彼等には、国内の政治的・軍事的問題に直接取り得る方策がかつての様にあつたとは思われない。バリニャーノの秀吉との会見も、この点成果を挙げたとは言えなかつた。かかる窮地に追い込まれた彼等に望みを抱かせたのは、実は、国内諸勢力が再び内乱を起し、秀吉の絶対的権威が崩壊するであ

ろうという噂であり、それは秀吉の中國侵略の決行表明をきっかけに、より具体性を帯びたものとして語られ、彼等にもその可能性の高い事が感ぜられた様である。

一五九〇年一〇月八日付長崎発の書翰でバリニャーノは、自らの使節行につき希望を繋ぎながらも、下地方で秀吉の意志に従つて重大な変化が生じ、有馬・大村の領地でも変動の生ずる危険性のある事を指摘している。⁽²⁴⁾ 更にその四日後には、秀吉は中國征服の為に下向するに際し、大規模な国替を行なう意向であり、有馬・大村の移封も噂されていると、より具体的に述べている。⁽²⁵⁾ キリスト教徒諸領主の国替はバリニャーノの言を俟つ迄もなく、下地方のキリスト教界にとつて重大な打撃となる筈のものであつた。

こういつた噂の中で宣教師は、キリスト教徒領主の領地内においてすら自肅を求められ、十字架の取り壊し、潜伏等を要請されに至つてゐる。⁽²⁶⁾ 一五九一年一〇月六日付のバリニャーノの書翰には、長崎統治の為に派遣された壱岐守（毛利勝信）と加賀守（鍋島直茂）は、その実、有馬・大村領の没収、あるいは国替の下準備及び、宣教師の滞留状況の調査にやつて來たという噂の存在とその信憑性の高さについて記述されている。⁽²⁷⁾

以上の様なキリスト教徒諸領主の国替＝キリスト教界の崩壊という危機感の中で、イエズス会側は秀吉の中國征服に反対する勢力の存在を窺知し、そこに一縷の望みを託している。一五九一年一〇月二二日付でバリニャーノは、中國征服計画に反対する者達によつて国内で重大な変化が生ずるかも知れないと抽象的に述べているが、翌一五九二年三月一三日付の書翰では、中國征服の真

の目的が諸領主を朝鮮の地に移封し⁽³²⁾、自分の直臣達で全国を支配する事によって秀吉の絶対的な権威を確立する処にあると指摘した後、この計画に反対するのは困難であるが反感は大きく、結局実現され得ず⁽³³⁾、国内に重大な異変をひきおこす様になるに違いないと語っている。また、この約一月前の二月一五日付書翰においても、中国征服が現実のものとなれば、日本に大きな異変と反乱が生起するに違いないと述べ、マカオの船（前九一年からの越冬船）が出発する迄に全日本が大きな擾乱に陥り、秀吉の計画も水泡に帰すであろうと述べている。結局彼は、この事態の推移を見守り、しかるべき対応策を講ずべく日本に残留する決意を固めたのである。⁽³⁶⁾

結果から言えば、こういったバリニャーノの予測と日本残留の決意は双方とも現実のものとはならなかつた。中国侵略は、まず朝鮮侵入という形で同年五月には開始され、国内反乱は極一部を除いて生起せず、バリニャーノはインド副王からの使節という立場上、秀吉の返書を持つてマカオ（インド）への出発を余儀なくされた。しかし、バリニャーノはマカオからも書翰を認め、日本に重大な変革が生起するという確信を繰り返し、その機に乗じて日本に戻る意向であると書き送り、秀吉の死への期待をも含めて、国内反乱により彼の権力が崩壊する事を信じていた。⁽³⁸⁾ その根拠は一五九三年一月一日付書翰によつて窺い知ることができる。バリニャーノは朝鮮における開戦時の戦捷にもかかわらず、一五九二年十月には早くも戦線が膠着状態に陥り、日本側の犠牲も徐々に拡大している事実を指摘し、秀吉の渡海も中止されたと述べて

いる。こういった状況を根拠に、彼は、朝鮮で戦闘に参加している領主達が無断で日本に戻り、反乱を起こすと予想したのであつた。バリニャーノの希望的観測をよそに、結果的にこの様な反乱は以後も生じなかつたのは言うまでもない。

しかし、秀吉は戦線の膠着にともない書翰を以つて国替えの三年間凍結を諸領主に宣言したと言われている。⁽⁴⁰⁾ 無論この事は、宣教師にとって少なからざる吉報となつた。その後、中国との和平交渉開始を契機に、中国布教への道が拓かれる事への期待が内外の宣教師により抱かれていたのは既に述べた通りである。先の通告通り、国替えは以後も実施されず、一五九六年一二月二八日付でフロイスは、和平交渉の決裂により、有馬・大村等の領主が朝鮮で戦闘を続いている間は領地の変更は為されないと予想している。⁽⁴¹⁾ ここでフロイスは、戦争の悲惨さにもかかわらず、戦闘の継続をむしろ希望している様な記述を行なつてゐる。バリニャーノはコチン発信の書翰でこの事に触れ、一五九六年二月付の日本からの書翰により得た情報に基き、日本国内に国替の恐れがなくなつたと、一五九七年四月二八日付で書き送つてゐる。⁽⁴³⁾

とはいゝ、戦況が日本に有利になり、朝鮮征服が進展すれば、再び国替の危険は再燃する筈であった。事実、一五九七年一〇月八日付でルイ・バレトが長崎から書き送つた書翰によれば、朝鮮において兼々ねらつてゐた一王国（地方）が征服されたという情報が朝鮮から秀吉のもとに届くや、彼は自ら下向する事を望んだ事が記され、それとともに、再び朝鮮への国替の危惧が生じてゐると述べられている。⁽⁴⁴⁾ 同じバレトは、翌年二月二一日にも、秀

吉の下向が迫つており、それによつて国替が実施されるという情報が届いた事を記録している。⁽⁴⁵⁾

結局、宣教師は国内のキリスト教勢力を視点に据えた場合、征服戦争の成功がキリスト教徒諸領主の国替⁽⁴⁶⁾キリスト教界の崩壊につながると考え、この戦闘が秀吉の死によつて結果的には交戦状態のまま終結し、征服地の獲得もできずに終る事になつたのは彼等には、主の攝理であると映つたに違ひない。一五九八年一〇月、パシオは、この戦闘により、キリスト教徒達は多大な出費と苦難とを余儀なくされたが、結果的には国替が回避され、キリスト教界の崩壊を免れる事ができたと書き送つている。⁽⁴⁶⁾

秀吉の死と、それによる戦争のいわば中途反端な結末は、その他の面でもキリスト教界に裨益したと言える。例えば、当長崎及び下地方の統治にあたつていた寺沢志摩守は、太閤の死に相前後して、急速に教会との接近を計り、教会に対する姿勢を極度に軟化させている。⁽⁴⁷⁾教会側も、この流動的な政局に対応すべく現状の慎重な分析を行ない本部に書き送るとともに、戦争の事後処理に下向して來た石田三成、浅野長政の双方に接近を計り、政治的な活動を再開している。秀吉の独裁的な政権下に息をひそめていた宣教師は、方針の変化が表面化する事を極度に警戒しながらも、状勢の変化に適応した積極的な対策を探るべく動き出したと言えよう。⁽⁵¹⁾

次に、長崎⁽⁵²⁾マカオ間貿易と中国征服計画との関係にも若干触れてみたい。

秀吉が一五九一年来航のナウがもたらした金を買い占めようとした事実については何度か論ぜられて来ており、その越冬の原因を金賣い占めに起因する軋轢に求めるのが一般的であるが、この他に、朝鮮出兵による影響も見る事ができるようである。

この事件については諸書に言及されているのであるが、一応簡単にまとめてみると、一五九一年八月一九日⁽⁵³⁾長崎に入港したナウは到着と同時に鍋島加賀守・毛利壹岐守⁽⁵⁴⁾の奉行人達によって封鎖され、舶載して來た金のリスト提出を命ぜられた。この間、既に長崎に集まっていた都・堺の商人や諸侯の代理商人達は事の成り行きを見て商売が不可能と考え、戻つてしまつた。この封鎖に對し、カピタンは九月二日付で秀吉の奉行に抗議書翰を送付し、その結果一〇月六日（ないしは、九月二六日）付で秀吉の朱印状が公布され、ポルトガル人達に非分を申し懸ける事が禁止された。しかし、結局ナウの帰港リミットである三月末迄には商人達は取り引きの為に長崎にやつて來ず、越冬を余儀なくされ翌一五九二年一〇月にバリニャーノ等を乗せてマカオに戻つた。⁽⁵⁷⁾ というものである。ところで、秀吉の朱印状は一〇月六日（ないしは、九月二六日）付で出されたものであり、翌年三月末迄十分取り引きを行なう時間的余裕はあつた筈で、約三ヶ月の取り引き凍結にのみ越冬の原因を求めるのはいさざか無理ではなかろうか。フロイス

の記録も、奉行による販売の妨害は「2カ月以上」とだけ述べ⁽⁵⁹⁾、この期間は先のナウの入港から朱印状発布（ないしその実効）迄の時間とほぼ一致する。更に、フランシスコ・ピレスによる簡単な年次記録である「覚え書」によれば、越冬の原因は朝鮮の戦争であると明言されている。また、前述のフロイスの記録でも、奉行達による妨害の他、秀吉の朝鮮出兵にも越冬の原因を帰している⁽⁶⁰⁾。フロイスは更に、商人が長崎に着いた時にはナウの出航時期は過ぎていたと言つており、当時の日本の政情を考えると、商人達が朝鮮出兵の影響でその行動に何らかの「制約」を受けていたものと思われる。天正一九年九月一六日（西暦一五九一年一月二日）に秀吉は征明の命を下し、即座に戦闘準備を開始させ、翌一〇年正月五日（同一五九二年二月一七日）に諸侯に出陣令を出し、自らも三月には名護屋に下つており、小西行長を将とする先発隊は対馬を経由して朝鮮に上陸、四月には早くも釜山城を抜いている。即ちナウ到着・取り引き凍結・封鎖解除と続き、その後一ヶ月足らずで征明の命が下され、翌年春のナウ出航リミット迄⁽⁶¹⁾の間に戦闘準備・出陣・戦闘の開始がそれぞれ行なわれたことになる。奇しくもナウの商品売り捌きの時期が朝鮮侵略行動の準備・開始期にあたつた訳で、この為商人達は通常の商業活動を「制約」され、軍需品・軍隊の輸送・供給などを「強いられた」ものである⁽⁶²⁾。残念ながら商人達の朝鮮出兵との懸り方を宣教師側の史料によつて直接知る事はできないが、この年のナウの越冬には朝鮮出兵が少なからず影響していたと考えると思われる⁽⁶³⁾。

一五九三年には、カピタンモール・ドミンゴス・モンティロのかわりに、ガスパル・ピント・ド・ロシエが来日した⁽⁶⁴⁾。この年の航海につき、ペドロ・ゴメスは一五九四年二月八日付書翰で日本イエズス会の利益が三〇〇〇タエル余にすぎないと予想されるとして、利益の少ない事を懸念している⁽⁶⁵⁾。この三〇〇〇タエルという額は多いとは言えないが、少なすぎるという程のものでもないようである。しかし、これ以外の事は今のところ知る事ができない。

一五九四年は欠航の年であった。この原因につき、前述のピレスは、カピタンモールのドン・フランシスコ・デ・サガダチンで死亡した事をあげている⁽⁶⁶⁾。また、ボクサーはマカオ||マニラ間貿易がこの時期拡大傾向にあつた事をも一因としている⁽⁶⁷⁾。日本からは、ナウの不着を危惧した書翰が送られている。一〇月七日付でパシオは、日本人と中国人が交戦状態にある為、中国人がポルトガル人に日本向けの商品の取り引きを拒絶しているのでナウが来ないのではないかと憶測している⁽⁶⁸⁾。翌九五年三月二〇日付でゴメスも、やはり欠航の原因を日本人と中国人との朝鮮における戦闘行為に帰する噂について書き送っている⁽⁶⁹⁾。日本国内ではこの欠航は朝鮮出兵による中国人の態度硬化が原因であるとの見方があつた事が、この二通の書翰から知る事ができよう。しかし、マカオからの一五九四年一月九日付のバリニヤーノ書翰では全く別の理由があげられている。即ち、前年（九三年）の航海が手間どり、しかも儲けが少なかつた為、カピタンも商人達も日本航海をしたがらなかつたというものである⁽⁷⁰⁾。一五九三年の航海は、多分、先

に引用したゴメス書翰の予想通り、利益が少なかつたものと思われ、その為折から拡大傾向にあつたマニラ＝マカオ間貿易に一九四年の日本航海に投資されるべき資本が流れていつたのかも知れない。バリニャーノ書翰をそのまま眞実と見做す事はできないが、當時マカオに滯在していたバリニャーノの発言は重視すべきであろう。

一五九五年には、ドン・フランシスコ・デ・サのかわりに、マノエル・デ・ミランダが、一五九六年には、ルイ・メンデス・デ・フイギレドが司教マルティンスを乗船させて、それぞれ来日し⁽⁷⁴⁾たと言われているが、取り引きについては全く知る事ができない。

一五九七年には、ナウは来港せず、フランシスコ・デ・ゴベレスのジャンクが長崎に入港し翌年二月に帰航している。⁽⁷⁵⁾

また、一五九八年にもナウの来港はなく、ヌーノ・デ・メンドサがバリニャーノ・司教セルケイラ等を乗船させた二隻のジャン

クで八月五日に長崎に入港し、一方は早くも十月にはマカオに向⁽⁷⁶⁾け出港し、大きなジャンクは翌年初頭、帰航中難破してしまつている。

一五九九年は、前述の大きなジャンクが戻らなかつた為、マカオでは日本で越冬したものと見做して、この年の航海を行なわなかつたものと思われる。⁽⁷⁷⁾

翌一六〇〇年には久しぶりにナウが日本に姿を現し、関ヶ原の役の余燼の中で、大きな利益をあげ帰航している。⁽⁷⁸⁾

以上の様に、朝鮮出兵の具体化する一五九一年から終結の一五

九年迄のナウの渡来状況を見て見ると、越冬こそ九一年の一度きりであるが、ナウの欠航は九二・九四・九七・九八・九九年、完全な欠航は九二・九四・九九年と、少なくとも交易が順調に行なわれていたとは言い難い。(もつとも、九五・六年の二年間については予断の限りではない)この不調の原因を朝鮮出兵にのみ帰する事は無論できないが、九一年のナウの越冬、九三年の利益の減少などは、朝鮮侵略戦争が大きく影響していた様に思われる。また、史料による直接の確認はできないまでも、朝鮮侵略が中国人とポルトガル人間の取り引きに何らかの影を落していった可能性も考える事ができる。(少なくとも、そういう危惧は存在していた。)マカオ＝マニラ間の交易の拡大傾向は、スペイン側の積極的な動きと大きな関係を持つものであるが、こういつた事情にも刺激されていたのではなかろうか。

註

(1) この会見に関しては古くから多くの研究が為されており関係史料もかなり紹介されている。岡本良知『天正十四年大坂城謁見記』松田毅一・川崎桃太訳『フロイス 日本史』1、松田毅一『秀吉の南蛮外交』『太閤と外交』、J・ラウレス『高山右近の生涯』村上直次郎訳『イエズス会士日本年報』下等々枚挙に暇ない。

(2) 一五八六年一〇月四日下関發バリニャーノ宛フロイス書翰 Archivum Romanum Societatis Jesu. Roma; Jap-Sin

頁、回訳『耶蘇翁の日本年報』ト 110 柄—1 回貢（但）
以上二つの訳は Cartas que os Padres e Irmãos...Tomo
II. Evora f.228v. に掲げたやうにその原書に回唐した者は、
ローリョ、フロイスの他にオルガンチノ、ダーハン・マリ
ン、グランガリオ・セスパニス。（Jap-Sin 45 II f.86）松田
毅一・川崎桃太訳『フロイス 日本史』1 110 回—15 頁、
岡本良知『天正十四年大坂城謁見記』1 五十八頁、松田毅一
『秀吉の南蛮外交』六一一五頁、『太閤と外交』五〇一回貢、
J・ラウレス『高山右近の生涯』1101 頁

(3) 一五八九年一〇月一〇日長崎発総会長宛オルガンチノ書翰
Jap-Sin 11 I f.70 「準管区長ペーデンヒルイス・フロイス、
それに私（オルガンチノ）は、その他何人かと共に閑白殿を
訪問に行つた。そして我々三人のペーデンが、何人かのキリ
スト教徒領主——即ち閑白殿の書記官、總司令官で最良のキ
リスト教徒である右近殿フスト——との時閑白殿のお気にい
りの人物、及び、その他の者と共に閑白殿の部屋にはこつた。
まず初めに準管区長ペーデンがはいり、次に私がはるかに先に
したが、ペーデン・ルイス・フロイスがとてもすばやく先に
行つてしまい、準管区長ペーデンの側に忽ちのうちに座を占
めてしまつた。この為、私は列に従つて、話をすらのに大変
困難な状況に置かれるを得なかつた。同ペーデン（準管区
長）との会見が執り行なわれ、最後に、ルイス・フロイスが
それまでの好意に謝意を表わしはじめた。そして、その後す
ぐに次の様に述べた。（閑白殿が）下に渡り、更には中国へ征
服に赴こうと決心してゐるのなら、ここに居るペーデン・ガ
スパル・コエリョに依頼なれる様に。彼は、この件につき、
多くの援助をする事ができあしゅう。ところのば、彼はほと

んどト全体を指揮下に置いているからでおつまむ。更に、1、
「隻の船をお望みならば、これら全てをしのペーデンは与え
る事ができ、またポルトガル人に依つて（その船を）操縦
(やかむ) 事ができるあります。」

私も、周に居た全ての者には、この様な事は（やむ）ことなく、
キリスト教界にとても極めて不都合かつ危険極まりない事
であると思われたので、すぐにペーデン・ルイス・フロイス
が話すのを止めさせようと努めた。しかし、右近殿フストの
切願にもかかわらず彼は（その話を）し、執拗に（その話を）
続けた為、それを妨げ、中止させる事ができなかつた。」

J・ラウレス『高山右近の生涯』1101—1 頁、なお、この
間の事情に就ては、松田毅一『秀吉の南蛮外交』六一一六頁
及び『太閤と外交』五一一回貢に詳細に述べられてゐる。

(4) Jap-Sin 11 II ff.234-v. 訳文については高瀬弘一郎『キ
リスト教時代の研究』109 頁及び回『イエズス会と日本』
(大航海時代叢書第一期6) 80—1 頁、J. L. Alvarez=
Taladriz "La Persecución de 1587 y el Viceprovincial
Gaspar Coelho, según el Visitador Alejandro Va-
lignano" Sapientia 9 のパリリヤーの書翰は、ヘン
ベス会士（殊にカグラル、ローリョ、フロイス等）が、国内
戦争において行なつた軍事的な介入が秀吉の危惧を増大させ、迫害の一因となつたという考え方の下に、かかる政治的軍
事的介入を規制する方針を改めて打ち立ててゆく過程（高瀬
弘一郎『キリスト教時代の研究』111—18 頁。回『イエズ
ス会と日本』1 八〇—1 頁参照。また、一五九一一六一
二年の間にも、この件につき方針の変更が加えられている
が、それはイエズス会本部からの指令に依る所大である。

Jap-Sin 2 ff.126, 126v. (Valignano: Obedientias 1592 Cap.º 2 § 5 y 8), Biblioteca Pública de Ajuda, Jesuitas na Ásia Codice 49-IV-56 ff.148-v. (Pasio: Obedientias 1612 cap.º 2 § 5), J. L. Alvaréz-Taladriz "Adiciones del Sumario de Japón" p. 459, Jap-Sin 3 ff.19v-20v (1597.4.10, Roma Pe General-Valignano)

(参考の事) 書かれたゆのべ、殊更ロヨリの介入を強調してゐる嫌いが見つかれる。就中、ヤハムカの軍隊の派遣については、秀吉の宣教師追放令に対抗すべくヨヨリが押し進めようとした軍事計画 (高瀬弘一郎『キリスト時代の研究』107-110頁) を、ベリリヤーへがの余見と作為的に繋ぎ合せた可能性が強い。

(10) 註(3)で掲げた松田氏の詳細な論稿を参照の上。

(11) 高瀬弘一郎『キリスト時代の研究』111-112頁 古くは、大友氏に対する大砲の斡旋、信長の依頼? に依る荒木村重の懷柔等の具体例に事欠かない。

(12) ここへた方針は既に述べた様に、ベリリヤーに依つて徐々に改革されていったのではあるが、この時点においては依然として (前のベリリヤー・田原をも含めた) 多くの宣教師によつて是認され、実施されたものであった。(高瀬弘一郎『イエズス会と日本』73-14頁参考) 秀吉の中国征服が具体化してゐる、ましてその実施がキリスト教徒諸領主及びその領地のキリスト教界に物心両面に亘る過大な苦難を強いる結果になるとは思ひもよらなかつた時点で、宣教師が前述の様な思考を為すのは極めて自然な事であったと言ふ。

(13) 『史料総覽』卷十一 150-160頁。

(14) Jap-Sin 45 II f.107v. 村上直次郎訳『イエズス会日本年報』下 110-119頁。Evora, Cartas II f.198v.

(15) Jap-Sin 11 II f.235. 高瀬弘一郎『イエズス会日本年報』下 110-111頁

(16) 松田毅一・川崎桃太訳『フロイス 日本史』1 119-120頁、田嶽一・川崎桃太訳『フロイス 日本史』1 110-111頁

(17) Jap-Sin 11 II f.235. 高瀬弘一郎『イエズス会日本年報』下 110-111頁

(18) Jap-Sin 11 II f.235. 高瀬弘一郎『イエズス会日本年報』下 110-111頁

(19) 岡本良知氏は以上の点につき前掲の論稿「長崎のヘッタ船」(『桃山時代のキリスト教文化』77-1-1回頁) 中で、本稿とは異なつた視点からではあるが、極めて示唆に富む指摘を行なつてゐる。本報告もその指摘に負う所大である事を認めぬに名がでない。

(20) Alvaréz "Adiciones..." pp.375, 452 松田毅一『日本巡察記』169, 179-180頁。

(21) ヤベペテスは前述の様に、一五八六年の大坂城での余見にて同席し、秀吉の朝鮮・中國侵略計画につき直接彼の話を聞いた。また彼は、日本人女性奴隸売買に関与した為、長崎のカーチから異動をせられており、こいつた経歴と今回の朝鮮行とは何か関係があるのかも知れないが詳しい所は不明である。

(22) Jap-Sin 12 I f.182. 一五九四年三月11日付長崎発ペルロ・ナメスの總余見宛書翰、アルカディオ・シワード「朝鮮における日明和平交渉について――主として外国史料による」(『キリスト研究』第一輯所収) 111-112頁。

(19) Jap-Sin 12 II f.333v-4 一五九五年一月一七日付都發
総金長宛書翰、ハドワード「前掲論文」三一六頁、矢沢利彦
「マホセラチャム文獻慶長の役」(『日本歴史』七〇所取) 一
六頁。

(20) Jap-Sin 12 II f.373v. 一五九六年一〇月一日田村書翰、
ハドワード「前掲論文」三一六一七頁。

(21) J. L. Alvarez-Taladriz "Documentos Franciscanos" Relación de las cosas de Japón para nuestro Padre fray Francisco Arzabiaga comisario general de todas las Indias en Corte. p.104 「丸五’ がだ’ ルン かへ中國くの（布教の）扉がひいかれる。ところは、この王（秀吉）は中國の一地方である朝鮮を従え、中國王は和平交渉の為に多くの贈物とともに大使節を（日本く）派遣したからである。また、今後中國人と日本人との間に多くの商取引あや交渉・親交が持たれる事になるであらうからである。そして、日本で、日本人・中國人間でキリスト教徒が多く親交と交際を行なえば、日本の国王によつて多くの者が中國に派遣される様にならうであらう。あたま、現在聖職者が（十分に）おれば朝鮮に派遣してこぬであらう。ところは、朝鮮の総司令官ムン・アウグスチンは熱心なキリスト教徒であり、彼等（聖職者）をその地に滞在させたであらうからである。（派遣あぐわ）聖職者がいれば、その者を派遣する為の他の機会やある（トウグスクハセ）提供あるであらう。」

(22) 高瀬弘一郎『キリストン時代の研究』七六一-一〇〇頁(「キリシタン宣教師の軍事計画」) 参照。

(23) Jap-Sin 12 I f.119. 一五九三年一月一日付給金長宛書翰

「中國教会のペーデン達は、ペーデン・ミケル・ロクリオニの計画を在中国のペーデン達が立て、その献策の為中国かへローマへ派遣された）が何も交渉せず、同ペーデンがニ要塞を作つてゐる。全くそゝの防備も、防備の（ローマ）持参した書翰の中で我々が書き送つた多くの疑

為の人員を供給する為にナウが援助を行なえる。長崎は全日本の鍵であり、この町からキリスト教徒やドン・アウグスチノの援助によりて、暴君を制圧する為の援助ができるであらう。

問・疑義について尊師が全く返答してへだめられないため、この中國教会の事態は極めて悪化してゆくと考え、かなり氣力や活力を減退させてしまった。事実、彼等には氣力を失なうに足る原因がある。というのは、マテオ・リッヂがその同僚とともに中國において追放同然になつてから既に十年が経過しており、今迄中国にはいつて改宗事業を開始する為の扉は全く開かれてはいない。むしろ中国人の抱いている用心や危惧は朝鮮王国への日本人の侵略行為とともに増大さえしておき、刻々と（改宗の扉は）しめられとゆく様に思われるからである。

（22） Jap-Sin 13 I f. 117. 一五九七年一一月二三日付マカオ発書翰（中國教会の維持は困難で、初期の頃からほとんど進展をみせていない事を述べた後、「その他に、人々にとつて外国人に対する恐怖心は少なかいものであつて、朝鮮に日本人が侵入したここ数年は特に（少い）中国の人達は再び外国人に対する恐れを抱きはじめた。」

（23） Jap-Sin 13 I f. 134v. 一五九八年七月一日付マカオ発書翰

「第五の最後の理由は、日本と中国・朝鮮との間に戦争が始まっているので特に少いであるが、多くの日本人イルマン・同宿が中国にやつて来るのを見て、中国人達が良い事と考えるとは思われないとしうることである。」

（24） 摂稿「キリスト教と日本人」II（『史学』四九一—所収）
（25） バリニャーノはその事後処理に神經を使わねばならなかつた。高瀬弘一郎『キリスト教時代の研究』（「キリスト教宣教師の軍事計画」）

（26） 当時宣教師が種々の政治工作をしていた事実は、フロイスの『日本史』（松田毅一訳『日本史』一一卷七五頁・一〇一頁等々）によつても明らかであるが、それ以前、及び十七世紀にはいつてからのそれと比べると極めて消極的なものであったと謂われるのである。

（27） Jap-Sin 11 II f. 227 「結局、日本における生活は、現在、有馬や大村の全キリスト教界について我々が陥つてゐる様に、常に希望と恐怖の間を往き來している。ところでは、（太閤）の意志によつて、既に終結した戦争が再発し、當下地方に重大な変動が生ずるであろうという事が、皆の間でかなり確実な事と考へられているからである。また、有馬・大村の領地でも同様な事が起るのではないかと我々が大いに恐れてゐるのも故なき事ではない。」

（28） Jap-Sin 11 II f. 234; Alvarez, Sapientia 9 pp. 101, 109

（29） Jap-Sin 11 II f. 246v. 一五九一年一〇月六日付長崎発
ベリリヤーノの総会長宛書翰、松田毅一訳『日本史』一一卷

七七・八一・八五頁等参照。

（30） Jap-Sin 11 III f. 247v. 「（長崎統治の為にやつて来た壱岐守と加賀守について）ある者は、閼白の命令で有馬・大村の領地を没収しに来たのだ、これ等の領主を移しかえに来たのだと言つてゐる。また他の者は、閼白が後に変更（国替）を行なう為の下準備に領地の調査に来たのだとも言つてゐる。

この情報はかなり正確なものとの様であつた。」松田毅一訳『日本史』一二卷八〇一九五頁。
（31） Jap-Sin 11 III f. 251. 「ひね（一〇月九日付の部分）を

書き終えてから、関白殿に関する他の情報が届いた。(関白殿は)中国についての企てを実行すべく決心しており、彼曰く、日本の主要な領主ほとんじ全員と三〇万の人員と共に(中国に)渡るというものであった。既にこの企ては全ての者に公にあれどおり、平丘の島の近くにある一つの港に、二つの要塞を作る様アゴスティーノ津守殿は命じている。そこに全軍と、これらの領主達が集合する筈である。全軍は多くの船を建造し、強固に準備されている。関白は大変急いでおり、朝鮮に五月初旬に渡り、そこから陸伝いに中国に行く為、人々に三月中に要塞を建設すぐ下に下る様命じた。

これ等全ての領主は呆気にとられ、この企てに大変不服であつたが、あえて口答えする者はない。関白はこの企ての為の維持費やかねを、各領主や司令官達にわりふつてゐる。彼らはこの中国に対する企ての途中で死んだとしても、自分の息子をなくした今は、自分の名声を残す事以外為すべき事はないと述べた。しかし、期限が大変短かく、皆が不承不承であるので、彼が命じてゐる期間内にはこの進攻は実施され得ないであらう。あるひばひの機会に、重大な変化・変動が生ずるかも知れな。

(33) Biblioteca Pública de Ajuda, Jesuitas na Asia 49-IV-57 f.291v. 松田毅一訳『日本史』二巻三〇六頁及び一六〇一四頁 「組屋文書」天正二〇年五月一八日付山中長俊書翰(徳富猪一郎『近世日本国民史』豊臣時代丁篇朝鮮役上巻四五八頁所収) 天正一九年八月二三日付加藤清正書翰(一八〇頁)木下至太郎『ルイスフロイス日本書翰』九九一-一〇〇-一〇九一-一〇頁。

Jap-Sin 51 f.352 (前掲木下訳の原文書)

「この企てがうまくすすめば、彼(秀吉)の言つている様に國替を行ない、キリスト教徒領主は他の者と共に朝鮮か中国の地に送られ、彼等が日本国内に持つてゐる領地は異教徒の領主に与えられるという事は明白である。この事は、我々及びキリスト教界にとって完全な崩壊を意味したであらう。といふのは、たとえあちらにより大きな領地を与えられたとしても、領主が替る事で長い間我々が働き、援助して来たその地のキリスト教界が、我々の隠れる場所もなく、失なわれるから全く益にならないし、我々はそんなに早くキリスト教徒領主が領地を持つ様になる中国や朝鮮に渡る事もできないからである。更に外国によつて力ずくで奪われた土地は、そんなに早くは落ち着かないし、決して安全とはならないからである。故に、関白が死ねば、既に疊されてゐる様に、全員が反乱を起すであらう。また、力ずくで征服した土地に多くの会員が渡るのも適切ではないであらう。」

また、領主自ら移封を願つたと言われる例も古くから指摘されている。例えば、「纂韓陣文書」天正二〇年六月二〇日付長束正家・増田長盛宛加藤清正書状(武野要子『藩貿易史の研究』一三六一七頁及び徳富猪一郎『近世日本国民史』前掲卷五七一一一頁所収)この例からむ、征服地への移封が必ずしも一方的に秀吉側からの強制として立案されたとも言ひきれないが、宣教師側の史料による限り、こういった意向がキリスト教徒領主側にあつた事実は読みとれない。

(33) Jap-Sin 11 II ff.288-v. 「むしの侵攻が実施される」と、全キリスト教界はめちゃめちゃに破壊されてしまつ。といふのは、彼の決意は朝鮮や中国に渡る事より、むしろ全領主をその家臣とともに日本から追い払う事にあり、これは全

領主が生死にかかわらず朝鮮に残り、彼が絶対の支配者となり、彼等の領地に対し好き勝手な事をする為であるといった事は明白に思われるからである。また、彼等が出航すればすぐには、閔白殿はその領地を自分の家臣に分けてしまい当下九ヶ国の絶対的な支配権を得て、自分の意志で全てを処理しようとしている事は確実と思われている。この（下の）国々に我々はキリスト教界の主勢力を持つており会の全組織も今やここにあるので、もし彼が名護屋に来てこの侵攻が実施に移されれば、まちがいなく会は全キリスト教界とともに崩壊してしまうであろう。（この）実施に關して、主が彼の計画を妨げて下さらなければ（実施に移されるのは）まちがいのない所だと広く考えられている。全てに關し、彼の持つている権力と支配力は強大で、彼のその強大な権力・氣力の故に、人々が彼に對して抱いている恐怖心・畏怖心は大変なものであり、どの領主もあえて、（朝鮮・中国に）渡る事はできないと言ひ出す最初の人間になろうとはしないからである。また、多くの（領主）が一致して彼に反旗を翻す様な事も少なからざる困難をともなう事である。というのは、（閔白は）自らこの朝鮮・中国侵攻に關し、反対する者及び何がしかの困難を言ひ出す者は、追放し殺すという法令を公布しているからである。故に、あえて反対したり困難を申し出る者もなく、皆急いでこの侵攻の為に多数の船を建造し、戦争用の武器弾薬を準備している。閔白も現在まで、名護屋に莫大な供給品・食糧を送つて來たし、送りつづけている。

以上の事にもかかわらず、この企ては全ての人々に悪くとられており、いかなる国に對してもこの様な残酷で暴力をふるう事が起るとは思われない。というのは、全ての人々が

（朝鮮に行く事は）閔白が（彼等の出発後）その領地を与えてしまうであろう者の手中に、よるべない自分の妻子を残して死に行く（様なものである）と考えているのは疑いのないところで、日本に何らかの重大な異変が生ずるに違いないと思わざるを得ない。私もまちがいなくそれが生ずるし、決してこの侵攻は実施されないと考えている。というのは、全ての人が死ぬ為に（朝鮮に）渡るといった事の他に、（この企業では）それ自体重大な困難を抱えているからである。この企てによって全日本がいかに大きな心配・氣苦労の中に置かれているかは説明できない程である。彼は毎日せかせかして命を求めている。この様な訳で船が出航しなかつた事が、理由にかなつていないと考えられても、我々はそれが主の摂理であり命令であると思っていて。というのは、この侵攻が万一実施された時に、事態に備える為に、会はこの船以外の避難所を持てないからである。またもし実施されない時には、当然（国内に）重大な異変が生ずるに違いなく、生じうる大きな変革・変動の故に、私がローマに行く予定だったイルマン達と日本に残留している事は神の摂理であろう。会も、キリスト教界も、この神の御处置に喜んでおり、我々は大いに満足して、当キリスト教界を主が前進させてくださるのを期待している。」

(34) 本稿IV章参照。

(35) しかし彼はこの様な国内の反乱を全面的に支持している訳では決してない。なぜならば諸領主が太閣との戦闘を余儀なくされ、いざれにせよキリスト教界が少なからざる苦難と危険に晒されざるを得ないからである。結局彼は、最終的に主の摂理に全てを委ねている。この点註(36)の史料参照。

(36) Jap-Sin 11 II ff. 283v-4v 「先発隊として派遣されるのはト九ヶ国領主で、家臣と共に派遣される。また、(秀吉は)彼等には中国で他の領国を与えるであろうと公然と言つてゐる。たとえ表面的には皆、彼に喜んで行くと言ひ、多大な武器や船を作つてゐるが、この企てに加わるに際し、重大な苦痛や極度な不満・悲愴感を抱いていない者はほとんど見出されないとと思われる。またもし(この企てが)決行されたとしても失敗に終るに違ひなく、日本で大きな異変・反乱が生ずるに違ひないと固く信じられている。というのは、噂によれば、多くの領主は朝鮮や中国に死に行く為に領地から引きずり出されるよりは、関白殿と戦つて家臣と共に自分の領地で討死する方を望むと決めてゐるからである。(この船がマカオに向け出發する以前に、この企ては全日本が重大な擾乱に陥る事によって崩壊するであろうと思われる。いずれにせよ重大な惨禍の他は期待できない。この苦痛のほんの僅かな部分ですら我々は耐える事ができない。というのは、全会員とカーザが、日本のキリスト教界の主要部分とともに、この下の地方にあるからで、もしここの領主達が中国に行く様な事になれば彼等は自分の領地や王国を失ない、当キリスト教界全体も崩壊し我々は救済策もなく、重大な危機に陥つてしまつてゐる。また、擾乱が生じ、(朝鮮・中国へ)赴く事をしないならば、関白殿と悲惨な戦闘をかまえねばならない。大変な恐怖心があるので、少なからざる苦難と危険に陥る事になるであろう。しかし、結局は主がキリスト教界と我々に特別の配慮を為したものから、これらの恐怖・危険もまくおさはれて下れるであろう。(中略) f. 284 もし彼(関白)が幸運にもナウの出發以前に死んだり、多くの領主

達が彼に反旗を翻したりして、結果的にその戦争が良い方向に向かう事が期待できる場合や、キリスト教徒領主が危険に陥る事なしに、当地に私が滞留できる様な場合には、病氣のふりをしたりしてマカオに船が行つてしまつても日本に残留するあります。しかし、インドに行く様強制されるのがおちのようです。(中略) f. 284v. (秀吉は甥に關白の職を譲ろうとしているが、これは名目上の事に過ぎない、しかし)もし關白殿が死んだり、中国に行つたりすれば彼(秀次)と我々がうまくゆかない事もないであろう。また、關白が當下にやって来るというので、当地九ヶ国領主達は異教徒であるキリスト教徒であれ、皆(戦闘)人員や、武器の準備をすすめなければならない。そして、名護屋の港を行つて彼の到着を待たなければならぬ。この為、これら領主達の間では、(朝鮮・中国出兵)が決定的な事で、關白がやって来るのが明白になった時点で、当地方や日本のその他の王国で重大な反乱や擾乱が惹き起こされると期待されている。そして、その結果、日本で極めて重大な大変革が行なわれる事であろう。(最後の中略以降は同書翰の追伸部分にあたる)

(37) 例えば梅北国兼による一揆などが挙げられる。『大日本古文書』島津家文書之一、三五六一七頁。『同書』二、二五九頁、『島津史料集』征韓錄一五五一八頁。『第二期戦国史料叢書』六所收)『熊本縣史料』中世篇第五県外史料、井上文書五四一九頁、新納文書七五三一四頁、『大日本古文書』毛利家文書之三、一七八一九頁(但し、年代比定に誤りあり)『同』小早川家文書之一、二八四一五頁、『史料綜覽』卷一一、三六一頁参照)なお、この一揆に關する教会側史料は、JapSin 51 ff. 353v-4. 一五九一年一〇月一日付フロイス年報、(木下「前

掲書』1111—111頁) 松田訳『日本史』11卷1六四—1六頁及び注(6)1六九—1七〇頁、(但しこの注では、梅北一揆と直接関係のない天正十七年の戦闘とが混同され、栖本殿を志岐麟泉とする等の誤りがある、もともとの点同氏は同書11卷1三四六—1七頁注(6)において、この一揆に参加した栖本殿は栖本鎮通であると推定を訂正しておられる。(本稿脱稿後松田氏は更に、回書11卷の訂補において明確に訂正しておられたのを見出したので改記しておる。)

Josef Franz Schütte. S. J. "Monumenta Historica Japoniae I" p. 407 (Ajuda 49-V-3 f. 10v.) 「この母(1591年)七月サンチャゴの頃に、ナシマド Umequita という名のサシマの1回令官が反乱をおこし、大きな擾乱が生じた。やの反乱で、彼は Izume no Yacata, Fatandono, Somotodono, Conzura が死んだ。」

Josephus Francisus Schütte S. J. "Introductio ad Historiam Societatis Jesus in Japonia 1549-1650" pp. 542-3. なほ、この一揆に關し看過でゐない事は、一揆の事後処理における、これを契機とした秀吉の国替実施を恐れたバリニャーノが、結城弥平次を仲介にし、浅野長政と商議せしめ隱密に処理すべく政治的な活動をした事である。これは日本側史料には見られないものであるが、軽視できない事實である。しかし、他にこれに觸及した教会側の記録を今のところ見出せない。

(33) Jap-Sin 11 II f. 330. 1591年11月六日付総余長宛書翰「隅田が死んだり、朝鮮に対する企てが今年うまく運ばないために生ずるであらわし期待されていた種々の擾乱の故に、今度のヤンヌーンで六月初めに日本へ渡れるようになる

かも知れない。(中略) f. 331. (日本へ同教を着任させる事は今のところ不適当かつ不可能な事であり) 日本へ同教が赴く道が閉じられているのは、この迫害がやがて終結し、日本で大なる改宗が行なわれる確実な徵候と私には思われる。また、日本の現状は、これに関し、大なる予想と希望とを与えていた事は疑いない。(中略) f. 331v. (同教が) 日本に行くのはどうしても不可能であるが、中国のこの港(マカオ)に渡来するは何の障りもなく、むしろ適切で、理にかなつた事と思われる。従つてこの四月には(中国)にやつてくると信じている。そして、そのうち閻白の死か、彼が今握つてゐる帝国と権力の崩壊によつて、その次の年には同教が渡来できる様主がおどりなし下さるものと期待している。」

(33) Jap-Sin 12 I f. 3v-4. 「閻白殿は去年朝鮮から始めて、中國を征服する事を決心し、この為10万人以上の人員を朝鮮に派遣する所とした。これらの中には我々のキリスト教徒領主達の全てがおり、その重臣達の大部分とともに渡海して行った。暴君自らも、更に10万人と共に渡海する筈であった。はじめに侵入して行った人々は全く抵抗を受けずに朝鮮の大部を従え、陸路100レーグワ以上も侵入し首都に至り、そこを占領した。この企ての名前は、アグスティノ津守殿と彼に同行した他のキリスト教徒領主達のものとなつた。彼等が初めて侵入し、王国の宮殿や首都までが征服された。彼等による征服の後、他の領主や司令官達が到着した。朝鮮の国王はその兵と重臣とともに、内陸伝いに中国との国境まで引きこもり、山々〔その王国には木々のおい茂つた大きな山々がある〕に隠れている他の朝鮮人達に対し、彼等の維持の為に出来る限りの食糧を持って来て、残ったものは全て焼

き払えと命じた。彼等はこの事をきちんと実行したので、日本人が土地の領主となり、町や土地を占領しても、僅かの間に食糧の重大な欠乏をきたしてしまった。(日本人達は)あたかも籠城している時の様にひどい空腹に陥り、その解決の為に出かけると、山々に隠れている朝鮮人があとをつけ、彼等に大きな被害を加えている。この他、日本人のものより大きく強力な多くの船で形成されている海軍によつても日本軍は重大な損害を加えられた。我々が出発した一〇月には既に、日本人はこの企てがうまく行く事に疑惑を抱く様になつていた。渡海寸前であつた閔白殿もそれを控えて都にもどり、人員を再編成し、別の年に渡海するであろうと述べた。この事で日本の政情は宙ぶらりんではつきりしない状態になつた。そして、次の事が確実と考えられ、かつ期待されていた。即ち、今年大きな異変と反乱が生じ、朝鮮に渡つた領主達の多くが閔白殿に知らせずに日本に戻つて来て、閔白は、自分の持つている司令官のうち最良で最大の部分と子飼いの者達をその家臣の大部分とともに朝鮮の戦争に派遣してしまつてゐるので、既に弱体化し消耗していると考え、日本に到着するや否や彼に対し戦争を仕掛けるであろうというものである。

しかしながら、我々はキリスト教徒領主の身辺に生ずるであろう事に大変心配している。というのは、食糧品の供給に関する事は他の誰よりもまぐいっている事を彼等の手紙から知つてゐるが、「というのは、侵略して行った最初の者なので、見つけた物を自分の中にできたからである」他のいかなる日本人よりも内陸深くはいりこんでいるので、ひきあげる時の危険がより大きいと思われるからである。必然的に殿にならざるを得ないし、背後に敵をひかえなければならない。従つて彼等に生ずるであろう事につき恐れを抱くのは当然で、彼等もその主要な家臣をともなつてゐるので、もし「主はそれをお望みにはならないであろうが」彼等に不都合が生ずれば、彼の領地で重大な異変が生ずるに違いない。というのは、主要な殿の全ては自分の領国その後継ぎたる幼い息子(しか)持つて(いない)「そのうちだれも六才を超えていない程である」し、暴君は自分の力が残つていれば前述の様にもし彼等がたまたま死ぬ様な事があれば、その領地を他の者に簡単に与えてしまふであろうからである。またもし、彼に対し反乱が生じ、他の領主が彼に戦争を仕掛けたりすれば、毎月の様に日本で生じている如く、異教徒のより強大な者によつて征服されてしまうであろう。(中略)以上が、我々が出発した一〇月頃のイエズス会会員及び日本が陥つてゐる状況である。」

(40) Jap-Sin 52 f. 250 「年報より分けられたノート・ここでは本年九六年に生じた諸事の経過、日本の俗的状況及びいくつかの奇蹟について論ずる」と題した記録「(和平交渉の失敗に対する)太閣の怒りは他の非常に重要な事を引きおこした。」

というのは、朝鮮の戦争が終れば、太閣は有馬・大村・平戸・五島に属するいくつかの領国・領地を替えるであろう事は確実と思われていたからで、それらの国々に我々はキリスト教界の大なる基礎とほとんどの勢力を持っており、異教徒の暴君の領有になれば、ほとんど全てが失なわれ、消滅してしまうたであろう。しかし、これらの殿達が朝鮮で太閣の為に働いていた戦いが続けられていれば、領地は同じ状態のままでおかれるからである。」

(42) ショーレー『前掲論文』三二四頁の訳文?はコンテクストから誤りとは言えないが、翻訳としては全く承服できない。ここでフロイスが披瀝しているのは、和平交渉決裂とそれによる戦争の継続が国替え防止につながったという見解であろう。

(43) Jap-Sin 13 I f.65v. 「(日本からの手紙により、太閤は甥の死亡)と、朝鮮征服の不調とによって、疲労しており、キリスト教徒に対して迫害を加えようとして、その年十分な年貢収入と領地を持った一一〇三人以上の領主が改宗した事がわかった。)その他のキリスト教徒領主も、たとえまだ朝鮮から日本に戻ってはいないとはい、自分の領地に変化の生ずる恐れなしに全員安穩としている。そして、(彼等の帰國が)毎日待望まれてゐる。」

(44) Jap-Sin 13 I f.70v. (68v.) 「ここまで書き終えた時、朝鮮の戦争と、キリスト教徒達に生じた事についての情報をうけとつた。それは、かねがね狙つていた有力な(朝鮮の)一王国を征服したというものであった。太閤は、この勝利に喜んで当下的王国長崎近くの要塞に留まる事を望んでいたといふ。これは我々がこれまで蒙つた事に更に加えられた少なかふれる難事である。またもし、想像されている様に、彼が当下から全てのキリスト教徒領主をその妻子・家族とともに朝鮮に送り出し、彼等にそこで他の土地を与える、彼等の(本来の領地)については、自分の異教徒の家臣に(与える)といふ事が事実であれば、我々がこれまで蒙つた最大級の苦難の一いつとなつた。」

(45) Jap-Sin 13 I f.130 「他の(手紙:註⁴⁴引用の一五九七年一〇月八日付書翰を指すと思われる)によつて、太閤が当

下の地方にやつて来て、キリスト教徒領主を追い出し、異教徒(領主)を置くという情報があり、それは我々にとって重大な苦難となろうと尊師に書き送つたが、今や将にそれが実現せんとしていると思われる。というのは、彼が一緒に連れて来る軍隊の為に大量の米をいれる大きな seleyros が既につづりはじめるからである。」

(46) Jap-Sin 54 f.14 「この戦争はキリスト教徒にとっては大変な苦労・出費となつたが、もしその戦争がなかつたら、太閤が日本のほとんど全ての領主に対して行なつた様な土地の没収を行ない、もゝと良くない他の土地を与えたであらう事は疑いなく、また、これによつて全キリスト教界が崩壊したであらうから、主に尽きない感謝を奉げるべきである。(主は)朝鮮に戦争を仕掛けるという太閤が犯した不正を、特別な摂理をもつて当キリスト教界の維持に役立てて下さつたからである。」(この書翰は一〇月三日付総会長宛のものであるが、訳出部分は五日以降に加筆された追伸部分である。)村上直次郎訳『イエズス会年報』キリスト研究二二輯二二二頁、及び、松田訳『日本史』二卷二二七頁も参考にした。

(47) Jap-Sin 13 I ff.166-v. 一五九八年一〇月四日付長崎発総会長宛ベリリヤーノ書翰「いかに太閤が命令をしよつと、彼が死ねばまちがいなく日本に重大な変化が生ずるであろう。既に、全領主は太閤が生きているのを疑つてゐるようであり、寺沢殿は軟化している。準管区長ペードンは朝鮮に寺沢を訪問する(為の人物を)派遣した。そこには、その当時、司教も私も彼に対し手紙を送つていなかつたが、我々が隠れていてみつけられるよりも(我々の到着を)彼に知らせた方が適当であろうと皆に思われたからである。この伝言を持

つて朝鮮に行つた者が（その地に）到着した時、既に太閤様の病氣の情報が伝わっていた。それについては、こちらを出发する前にはまだ知られてはいなかつた。この情報で寺沢殿は大変軟化し私の来日は的確なものであつたと言つた程であった。というのは、時間が経つに従つて、より適切と思われれば、（こわいこと）滞留したり、（日本に）行つたりする事ができるからである。私は彼に書き送らなかつたのに伝言を持参する者を送つて来て、私に対しても祝辭を丁重に書き送つて來た。そしてこの前出発した後、インドに向けて私に手紙を書こうと思っていたが、我々の言葉も習慣も知らないのでそうしなかつたと書いて來た。また同時に、準管区長パードレに対し米二〇〇梱（俵？）を送る様命じた。これによつて我々は皆、彼が軟化し、我々が安全となつたと考えた。

私はまた、キリスト教徒領主達にも朝鮮へ訪問する為の人物を派遣したが、彼等は皆私に返書を送つて来て、我々の来日に大なる喜びを示し、主の摂理の忠告、やり方と人間の知との間にいかに大きな違いがあるかが現示された。また、我々は安心する事ができ、今のところ寺沢と非常にうまく交渉ができるであろうと述べた。同教の来日については、キリスト教徒領主は皆知つてゐるが、いくつかの妥当な觀点からして、そんなに早く寺沢殿には知られない方が良かろうと思われた。また、皆が強く次の様に我々に勧めた。即ち、これらの情報にもがかわらず、太閤様が死に、今朝鮮にいるキリスト教大名が戻つて来る迄は、（我々の活動方針）に変更を加えるべきでなく、我々が常に維持して來た慎重さを以つて生活すべきであるという事であつた。というのは、太閤様は既に和平を決心しており、最善の方法で日本に戻る様命じてゐるか

らである。それ故、我々は今迄隠れて來た方法でもいい。未だいるのである。（なお、この書翰に近い趣旨の書翰を「〇日付でも書き送つてある。」（Jap-Sin 13 II f. 187）

(48) 村上訳『イエズス会年報』キリスト研究第一一輯一一一三頁) 一五九九年一〇月一〇日付総会長宛バリニヤーの書翰。

(49) 村上訳『前掲書』一一三頁。

(50) Jap-Sin 13 II f. 260. 一五九九年二月一一日付長崎発総會長宛バリニヤーの書翰「全キリスト教徒領主にとつても、我々にとつても、今のところ噂になり、太閤様にかわつて統治を行なつてゐる人々に不快な感をもたらす様な変動を行なうのは適當ではないと思われた。というのは、当地では異邦人である我々が、太閤の死に對し、変化や喜びを示す様な誤りを犯したと思われない為である。〔同様に、今迄日本人に対し、大なる効果と教化を以つてやつて來た。〕しかし、彼の死によつて我々は全キリスト教界とともに障碍物をとり除かれ、我々に害を与える事のできる敵対者をもう持つていないと皆に思はれてゐる。また、日本の改宗の大なる扉は開かれたとも考えられてゐる。更に、日本では無分別に思われる様な外的变化を我々が示さなくとも、この平穏がいつまでも続く筈はない」と書かれてゐる。

(51) Jap-Sin 13 II f. 257v., Biblioteca de la Real Academia de la Historia, Madrid; Cortes 565 (9-2665) ff. 19-22v. 一五九九年二月一一〇日せ長崎発「ヨーロッパへのガル管区長宛書翰及び註」所用史料参照。

(52) 高瀬弘一郎「キリスト教と統一権力」一〇六頁（『東洋史座日本歴史』近世1 所収）C.R.Boxer: "The Great Ship

from Amacon" pp.55-6, pp.319-22 (但) 秀吉がこの金の賄いを命じた事實を直接語つてゐる史料はない様である。

(53)

一五九一年一〇月六日付長崎発バリニヤーノ書翰 (Jap-Sin 11 II ff.248-v) 木下『前掲書』及び、松田『日本史』一二卷一〇〇頁 (国内史料もこれに相当する)

(54)

鍋島・毛利とイニス会との間にそれ以前から輒轢のあつた事もこの事件に影響を与えていたかも知れない。(松田『日本史』一二卷七五一八〇頁)

(55)

『佐賀縣史料集成』古文書編第三卷「鍋島家文書」二八二一三頁 (『長崎叢書四』『増補長崎畧史』下巻三八九一九〇頁) 邦暦七月一五日付書状、但し『佐賀縣史料集成』はこれを天正一〇年に比定しているが、天正一九年の誤りであろう。なお、違つた根拠からではあるが、小葉田淳『金銀貿易史の研究』六六一九頁、Boxer, pp.319-22 も天正一九年説を採つてゐる。

(56)

『佐賀縣史料集成』前掲卷一八四一五頁 (『長崎叢書』三九一頁) 邦暦八月一九(九)日付朱印状

(57)

一五九一年一〇月六日付前出バリニヤーノ書翰 Jap-Sin 11 II ff.248-v. 木下『前掲書』七五一九頁、松田『日本史』一二卷一〇〇一六頁。

(58)

この点從來の解釈では越冬の原因をこの輒轢に求める余り、朱印状、甲比丹の抗議書等を天正一〇年に比定してはだしかし、いつこゝた比定はいわゆる無理である。Boxer, Great Ship pp.319-22 註⁶³参照。また一六〇〇年の航海を参照の事 (高瀬弘一郎「糸割符制度の起源について」『古文書研究』一四号所収)

(59) 一五九一年一〇月一 日付フロイス年報Jap-Sin 51 f.352.

(60) Ajuda 49-V-3 f.10v. (Boxer, Great Ship p.55) 「カムタノ・ロケ・シ・メリ」が長崎に着いた。朝鮮戰争の際、その年売れなかつたのを越冬した。」

(61)

Jap-Sin 51 f.352. 「このナウが越冬するなどとは迷ひんどと考えられていなかつた。むらつのば、当地(長崎)に(ナウガ)着いた時には既に三〇〇'〇〇〇ドウカード以上を持つて商人達が待ちうけっていたからである。そんな事は日本では今までなかつた事であった。それ故、今年は今迄よりは短期間で売り捌けるであらうと考えられた。もし夷岐守や加賀守が前述の様に一ヶ月以上も販売を妨害したり、関白が朝鮮への企てを実行したりしなかつたら、そくなつていたであろう。」

(62)

Ibid. 但し松田『日本史』一二巻では (一〇六頁) 秀吉かの書状が届くと金を求めて商人が殺到し、金は極めて高価で売却された事になつてゐる。この時期がいつか判明しないが、金だけは戦時における重要性故に、その年内に売却されたのかも知れない。絹(生糸)に関しては翌年にもむちこれがた事は明らかである。

(63)

この間の日時は『史料綜覽』巻十一に依る。

(64)

無論ある種の商人団はこれらの軍需関係事業に積極的に関与し利益を上げていた訳である。しかし、まさにその意味において、この戦争が彼等を含めた商人達に「制約」を与えていた事はまちがいない。

(65) 註⁶²に記した金の売価高騰もその現れであらう。この他、この年の航海についての史料を次にあげておくこととする。

一五九一年一月一五日付長崎発バリニヤーノ書翰 Jap-Sin

11 II f.283v. 「ナウが今年(貳)中国に向ひ出航であるが、

つかわからぬ。ところは、綿(生糸)はほとんど売れておるが、1月15日現在に至りて、埠や都からやって来る

と期待されてゐる商人達は來ていなかつてある。もし三月中に売り捌けなければ、それ以後は出航できなくなる。商人達がやつて來るのは一月半である。この事や、全日本に存在する動搖や悲嘆の原因は、他で書いた様に閨白殿が大軍をもつて中國征服なる事を決心してゐるからだ。

(68) Ajuda 49-V-3 f.11. (Boxer, Great Ship pp.57-8,

Schütte, MHJ I pp.407-8)

(67) Jap-Sin 12 I ff.168-v. (福瀬『前掲書』甲丸11-11頁)

(68) Ajuda 49-V-3, f.11, (Boxer, Great Ship p.58, Schütte, MHJ I p. 408.)

(69) Boxer, Ibid.

(70) Jap-Sin 12 II ff.197v-8. 「(今月はナウが来ない様であるが、我々は大変な窮状に陥つておる、もし本当にナウが失なわれれば重大な事態となる。)日本人と中国人とが朝鮮で行なつてゐる戦争が原因で、中国人が取り引きを拒絶しているので(ナウが)出発しないのだと想像し、ナウが失なわれたものではないと期待してゐる。」

(71) Jap-Sin 12 II f.259v. 「それによつて我々の維持の為の物資が届けられぬ中国かいのナウが、今年は欠航したので、我々は大変な苦難に陥つてゐる。何人かの主要なキリスト教徒が米を我々に与えるという救いがなければ、もつと酷い事になつていただろう。ナウが来なかつたのは、今、日本人と中国人との間で朝鮮において生じてゐる戦争が一原因だと云

ねれども。」

(72) これは当然、中国人の外国人アーレルギーの増大と結びついでいる。註²²及び本文参照。

(73) Jap-Sin 12 II f.222v. 「(マリリヤー)の来日は現在のところ(京都やおゆくら)返答といふに、今年は航海もなかつた。ところが、ナウが大変遅く戻つて来て、儲けも僅かだつたので、カピタンも商人達も航海をしたがらなかつたからである。」

(74) Ajuda 49-V-3 ff.11-v. Boxer, Great Ship pp.58-9.

(75) Ajuda, Ibid. f.11v. Boxer, Ibid p.60.

(76) Ajuda, Ibid. Boxer, Ibid. pp.60-1. なまくねなジャノクの出航につき Jap-Sin 54 f.1 また、この他にヒル・デ・ト・マタの乗船したジャノクがマカオを喪失し直接日本に歸着してゐる。

(77) Boxer, Ibid. p.61.

(78) 索逸の「六〇年」の航海についての文献参照。